

宗教心理学研究会ニューズレター

第13号 2010.11.25

宗教心理学研究会

Society for the study of psychology of religion

目次

公開講演会報告「宗教性発達研究の謎を探る」	報告 横井桃子	1
再び宗教性発達の問題点を探る	恩田 彰	14
記憶よりもさらに深き刻印	田畑邦治	18
恩田先生の講演を聴いて	Masami Takahashi	19
宗教性発達の意味とG/T を用いた研究	岡村直樹	20
宗教再考の夏	工藤弘憲	21
書評:大田俊寛著「グノーシス主義の思想」春秋社 2009年 グノーシス主義の思想—〈父〉と いうフィクション	根本和子	24
事務局からのお知らせ		26

公開講演会報告「宗教性発達研究の謎を探る」

日時: 2010年6月26日(土) 14:00-17:00

場所: 白百合女子大学 3号館 3116教室

報告 横井桃子(京都女子大学大学院)

本報告については、「Ⅰ. 講演」の内容は、恩田彰先生より許可をいただき、先生が作成した当日配付資料をそのまま掲載した。「Ⅱ. 神・仏と悪魔(魔)の関係についての補足説明」および「Ⅲ. 質疑応答・フロア討論」は、報告者である横井がまとめたものである。

Ⅰ. 講演(当日配付資料より)

「宗教性発達研究の謎を探る」

恩田 彰

このたび日本人の宗教性発達研究について、思うところを述べてほしいと依頼され、軽くお引き受けしたが、時間がたつにつれて、宗教の本質にふれる根本問題に直面することになり、極めて難しい課題であることがわかってきた。しかし重

要なテーマをいただいたと思い、敢えてその究明につとめてみたいと思う。

1. 宗教性の捉えにくさと宗教性発達への抵抗

宗教性とは、ある宗教をどの程度信じているか、感じているかという「宗教意識」と、瞑想、祈り、礼拝などを行う「宗教行動」を包括する概念である。そうした宗教性は、一般に年齢が高くなればなるほど高まると見られているが、実際には必

ずしもそうはならない。キリスト教意識の先行研究(星野 命・安倍北夫, 長谷川浩一, 中村陽三)によれば, 中学生のほうが高校生よりもキリスト教意識が高いことが示されていることから, 松島公望(2006)は, 中学生は高校生より高い「宗教性」を示すという仮説をたて, 一部の宗教性において中学生のほうが高校生よりも高い得点を示したことから, その仮説が支持されたという。

しかし松島の研究では, 「体験」(回心などの宗教的経験), 「共同体」(宗教的組織の参加, 貢献の度合), 「効果責任」(効果は信念, 知識, 体験, 行動の四つの次元が信者の生活や行動, 精神などに及ぼす社会的影響であり, その中の責任は倫理的禁止の受容や宗教集団の責務を全うすること), 「行動」(礼拝, 祈りなどの宗教的行動)の下位概念において, 中学生が高校生よりも有意に高い得点を示したが, 「信念」(宗教的な教えを信じること)や「効果報酬」(心の平安, 悩みからの解放, 幸福感など)では, 有意な差は見られなかった。こうした得点が低下する現象について, 松島は高校生特有の宗教への疑惑や抵抗かもしれないという。そして星野(1977)がいう「宗教意識は個人の内外の条件によって変容したり崩壊したりする」がこれにあたる可能性がある。しかしながら宗教性の根幹をなす「信念」で有意性が見られないことは興味深い。高校時代に一旦崩壊するように見えても, 宗教性はこの「信念」を中心として青年期後期に新しい局面へと「変容する」(星野, 1977)可能性があるとして述べている。

以上のように, 中学生のほうが高校生よりも宗教性が高いという結果については, 実際に宗教性の発達過程において低下が生じているのであろうか。その理由として, 高校生は中学生よりも宗教性に対して知的理解が高まるが, その体験的理解がそれに伴わず, その間にずれを感じて, 懐疑や葛藤やさらには自己否定が生ずるのであろうか。後にさらに考察するが, 発達のには宗教性が高まっているにもかかわらず, その自覚への抵抗が生じて, 低く意識化されているのであろうか。

ここで取りあげたいことは, 宗教性研究における宗教性の捉えにくさの問題である。人間は真実なるもの, 特に究極的な真実, 自己を超越する存在, すなわち神, 仏, 宇宙の意志, 靈魂, 超心理現象, 超常現象, 奇跡, 英知, 悟りの知恵, 至高経験, 独創的な創造や発明や発見, 先端的探検など, それらは体験できるかもしれないが, それらを意識化し, 気づき, 受容することは, 決して容易なことではない。その際, 宗教意識調査などで, 普通の意識レベルに浮上するものは, 捉えることはできるが, 至福を伴う深い宗教体験, 高次の回心, 悟り, 啓示, 英知など, これらを自覚し, 気づき, 受容するには, 私たちが簡単にコントロールできない抵抗が生じることがあるのではないだろうか。また宗教性発達についていえば, 真実なるものの探究といっても, より真実なるもの, 悟りといってもより深い悟り, 回心でもより高い回心などを体験する場合は, それらを受容して, 自覚的に体験すること自体への抵抗が生じ, それらを意識できないどころか, 自己の心身に障害が生じたり, 自己のまわりに事故や病気が生じたり, 他から妨害を受けることも起こるのである。ところがこれらの困難や障害を克服し, 努力しようとするのが宗教性発達を促すのである。すなわちより高次の宗教性が体得できるのである。

2. 幸福否定治療論から見た宗教性発達

宗教性発達の経過に生ずるとされる抵抗について考察するにあたって, 取りあげたい問題がある。私が心因性の疾患の心理療法にかかわったことから究明している問題である。その心理療法を行っている笠原敏雄(2004)は, 初めに統合失調症, その後に主として心因性疾患を対象として長年にわたり心理療法の経験を積んできたが, 反応としての心因性疾患の症状とそれらを引き起こす抵抗という現象を確認し, それらが幸福否定という, 人間全般に見られる, この上なく強い意志と, その裏に見え隠れする人間性の本質を見出してきた。ところがその自覚ができないという抵抗があるため, 無理な個人的解釈をして, 真実を隠蔽してしまうというのである。そこで笠原の心理療法に基づく人間観について考察する。

- ①人間の心は、意識と無意識からなっている。無意識は、一番根底にある本心とそれを否定しようとする内心の二つから構成される。そして人間の行動は、ほとんど無意識に基盤を持っている。
- ②人間の本心には、絶対的自信と高潔な人格と共に、全知全能ともいべき知識と能力が潜在している。それに対して内心は、さまざまだが、それらを否定しようとする意志を持っている。その知識と能力は、本心ばかりではなく、内心もある程度利用することができる。ここでいう本心は、全知全能ともいわれる神性や仏性に相当する。本心と内心との関係は、宗教でいう本心が神なら内心は魔とか悪魔と呼ばれるものに相当する。
- ③通常内心の知識や能力は、主として自分にとってマイナスの方向に働き、しかも意識に分からないような形で発揮される。内心は本心の自覚を妨げ、その内心の意図は自分では容易に自覚できない。
- ④それは自分の幸福を回避ないし否定しようとする強い意志が内心に潜在しているためである。その結果、知識や能力を自分にとってプラスの方向に日常的に発揮できないようになっている。したがって危機的状況を除けば、それが意識にのぼることはほとんどない。本心では幸福を感じても、それを内心が隠蔽して、意識化しないように工作する。そこに抵抗が生じて、いろいろな反応が生ずる。例えば居眠り、生あくび、心身症などの症状などである。
- ⑤そこで内心は、自分にとってマイナスの方向に発揮される自らの能力を自ら隠す手段として、意識を使う。すなわち内心は、幸福を否定し続けるために、都合の悪い記憶(真実の記憶)を思い出さないようにしたり、内容を変容したりする。
- ⑥その意図に沿って、人間はさまざまな歪んだ行動(いわゆる異常行動)ばかりでなく、多様な心因性の症状を自由に出現させたり、消失させたりする。

- ⑦そのことに関連するが、人間は意識の上では常に自らの品性や知識や能力をさまざまな程度に矮小化しながら、日常生活を送っている。そのため人間は自分の行動の真意を意識ではつかめないようにしている。そのためもっともらしい理由をつけて、自分の意識を説得しようとしている。
- ⑧人間は、極めて緻密な計算に基づいて、意識に隠された能力を駆使しながら、内心の思い通りに行動している。そこで本当の自分とは大幅に異なる姿で、現実の生活、時には一生を送ってしまっている。

その一例を示す。ある女性は、結婚、数年前から夫が帰宅する足音を聞くだけで、強い偏頭痛を起こすようになった。そして夫が自分の近くに来ると痛みがさらに強くなる。ところが夫の姿が目の前から消えると、その瞬間に偏頭痛が消えてしまうというのである。

この女性は、その症状が最初に出現する直前に起こった出来事(心理的距離が近いことが分かる自己主張や口論など)を通じて、夫に対する愛情を感じずようになっていた。そのためそれを思い出させる出来事の記憶を意識から消し、幸福感が意識にのぼらないようにするため以前から時々利用していた「夫が嫌いだ」という思いこみを強める。その思いこみが正しいことを自分に証明するために、夫の足音が聞こえると同時に、自分は夫を不快に感じることの証拠になりそうなものとして偏頭痛をつくりあげたというのである。そして夫が目の前にいる間は、その戦略をさらに強化する。しかし夫の姿が目の前から消えると、その瞬間に偏頭痛が消えてしまうというのである。

笠原は、心因性の症状は、本来うれしさ(喜び)を否定した時にこそ出るのであって、楽しさ(快感)が関係する時には出ることはない。楽しさを否定する人たちは少ないからであるという。このうれしさ(喜び)というのは、快感ではなく、フランスの哲学者アンリ・ベルグソン(Henri Bergson)がいうように、障害を乗り越えること、成功したこと、創造の喜びであることに相当するという。そしてうれし

さとは、人間の内発性およびその発現と密接に関係する感情であり、人間自らの目標を達成する方向、すなわち何らかの創造や人格の成長に向かっていくことを感ずる喜びであると述べている。

またこの幸福否定の反応や症状は、いままで取りあげた原因とはちがった異質の原因からも起こるといふ。フランスの作家スタンダールが、1817年フィレンツェを訪問した時に起こった心身症的反応は「スタンダール症候群」と呼ばれ、歴史的な聖地であるエルサレムを訪問した旅行者が起こす精神病的反応は「エルサレム症候群」と呼ばれている。

またある30代前半の男性デザイナーに、龍安寺石庭の写真を見せた。するとその瞬間に、男性は「これは拷問です」といいながら激しい吐き気を起こした。その写真から目をそらせば、すぐに反応が消えた。この男性は、それまで龍安寺の石庭を写真を含めて、一度も見たことがなかったという。

またある30代半ばの男性は、思春期以降に発病した気管支喘息が、心理療法によってほとんど治っていたにもかかわらず中国の敦煌に着いた時、数年ぶりに本格的な喘息になっていた。敦煌は高地であるが、この前後にもっと標高の高い所に何度も行っても、他の場所には出ていないから、高所による再発とは考えられない。この男性が敦煌を離れると、続いていた発作もすみやかに消えたという。

笠原が行う治療法は、感情の演技と呼ばれている。感情の演技は、場面のイメージではなく、感情を作らせるのである。例えば「病気が治ってうれしい」「目標が達成してうれしい」「幸せになってうれしい」というように感情を作らせようとする、いずれも難しく、あくび、眠気、身体的変化という三種類の反応がほとんど例外なく出現する。時間の長さは、2分で5回をひとつの単位として、1日に2単位、すなわち10回ほど行うようにしている。

感情の演技では、抵抗が起こりやすくなるように、感情を作るのがなるべく難しい条件(課題)を

選んで行うほうが効果的である。というのは、感情を作らせることを通じて、幸福に対する抵抗に直面させ、その抵抗を弱めることが、治療に直接つながるからである。感情の演技では、幸福の否定が弱まるにつれて、心因性の症状が軽快するだけでなく、他のさまざまな側面も多かれ少なかれ好転するのである。どのような点が変わるかについては、個人差があるが、一般的には、いろいろな点で自信や自発性が出てきたり、対人関係が改善したり、相手からの信頼感が増したり、種々の能力が高まり、人格や徳性が向上するなどの変化が見られることが多い。しかもそれは後戻りすることがないという。

次に注目すべきことは、好転の否定という現象である。どのような疾患を持つ者でも、あるいは病気でなくても、本人の内心の許容範囲を越えて、何らかの好転が起こると、それらを全員が否定するというのである。そうした好転が起こるたびに、必ずその否定を起こすのである。その場合、大きな好転は否定するが、小さな好転は認める。好転を否定した結果、心身の症状を作るものもあれば、異常行動をおこすものもあり、墮落した生活にふけるものもあるという。

この好転の否定は、次のような特徴を持っているという。

- ① 否定の結果として起こる症状や行動は、それまでにないほど強いこともある。好転の大きさとほぼ正比例する。精神分裂病(統合失調症)の場合、大きな好転が起こると、その否定の強さは尋常ではない。
- ② 小さな好転を除くと、本人は悪化したとしか思わず、悪化した所だけを強調する。第三者が指摘しても、それを認めることはまずない。
- ③ 自分の内心が気がすむまでけちをつけるという目的で作っているのだから、いかに強固に見える症状でも、放っておくと、やがて消える。その後には好転だけが浮かびあがるのである。

笠原の心理療法では、好転の否定が最も重要な概念の一つになっている。というのは、好転の否定が起こるたびに、それを乗り越えることが、

治療の要になっている。本人にとってこれを克服することが重要なのは、せつかく大幅に好転しているのに、それを否定したまま、その時点で心理療法を中断し、そこで進歩を止めてしまうことになるからである。

この好転の否定は、宗教性発達においても同じような現象が起こりうると思う。例えば宗教的信仰や修行によって、宗教性がより高次のものに発達すると、そこに抵抗が生じ、その反応として、本人の心身ならびに周辺において、種々の問題が生ずることが考えられる。

松島・宮下(2008)は、日本人クリスチャンの「キリスト教における宗教性」発達モデルを構成したが、それに基づいて神学生 7 名について面接調査を行い、それぞれ個人史をまとめた。その中から個人の宗教性発達に伴う抵抗として出てきたと思われる事象をあげてみよう(表1, 図1を参照)。

発達過程の局面(発達段階)が 15 段階に分けられている中で、9 段階(7 人が高次の回心体験“きよめ体験”, すなわち人間の自力でなく神の恵みによって神性が実現する)をしているが、そのうちの 3 名は、その後、その回心体験に対して疑問や不安を感じている。この段階では、知的理解が高まっていて、体験的理解とのずれを感じたという理由もあげられる。しかし実はこのレベルで、高次の回心体験をしているからこそ、これを否定しようとして、その抵抗としての反応が生じているのではなかろうか。

12 段階(気づき体験の深まりで、キリスト教理解が深まり、それに基づいて実践につながっていく)で、事例 D は Z 神学校に入学するが、2 年次に対人関係のトラブルから休学する。今までとは異なる捉え方や自ら向き合おうとする傾向が現れる。また新たな神学校で新しく学び、自我関与が高まる。こうした対人関係のトラブルという挫折をしているが、新しい転機をもたらしている。

13-1 段階(クリスチャンとしての自分をそれだけ受け入れているか、また、対峙しているかという重要な局面に直面している)では、事例 C は牧師としての教会生活でのつまづき、事例 D は一

歩引いた形式的な関わりになっている。しかし休学からの一連の出来事を通して、主体的に受け止めるようになる。事例 E は自分の教会の信徒と分裂してしまい、牧師をやめることになり、クリスチャンとしての自分を見失ってしまう。事例 G はスタッフとのトラブルから深い神の愛を知り、「きよめの体験」をする。しかしこれがきよめの体験かどうか疑問が生ずる。この段階では、宗教性が成熟していく過程で、それを否定するように抵抗としての現象が生じているように思われる。宗教性の向上、進歩を否定するように、抵抗としての反応として、自己の心ばかりではなく、自己のまわりで問題を起こしていることも少なくない。中には宗教的修行や信仰をやめてしまうところまでゆくこともある。しかしここで注意すべきことは、いわゆる好転の否定、ここでは宗教性の向上、発達の否定は、一時的には著しく現れても、やがて消えてゆき、本来の向上、発達した姿が自己自身および周辺に現れ、それを自覚し、受容することができるようになるのである。要は、こうした宗教性発達に伴う、それを否定する抵抗を克服していく努力こそ宗教的修行者または信徒として取るべき態度である。

以上の考察は、松島・宮下の研究に出てくる事例について、笠原理論に基づいて私が適用した一考察にすぎない。したがってその真実は分からない。ただ宗教性発達の真実の可能性について示したかったからである。笠原は、感情の演技を中心にした心理療法を、“史上最難関の修行法”と半ば冗談で呼ぶことがある。素直なうれしさを作らせるのに、心理療法が進めば進むほど、意識ではそれが大変な苦痛になってくる。それは幸福の否定から、自分で作りあげた架空の苦しみに喘いでいるにすぎないのだといっている。この感情の演技は、心理療法としても、またいわゆる修行法としても、その心理的メカニズムを意識化し、気づき、自覚することがかなり難しい方法であるということができると思う。

3. 宗教的自覚としての神と悪魔

先に述べたように、人間の無意識の中で働く

本心と内心との関係であるが、まさしく本心は神と呼び、内心は魔または悪魔と呼んでよいと思う。仏教とくに禅とキリスト教との関係にくわしく、両者の関係を論じている阿部正雄(2000)は、仏と魔およびキリスト教の悪魔と仏教の魔との関係について考察している。すなわち「魔を何か自己の外なる存在としてみるのではなく、あくまでも主体的な宗教的自覚のうちの一問題として考究しようとしている。」そして「魔の自覚との対決を経ない宗教的自覚は、いまだ真に徹底した宗教的自覚とはいえないであろう。イエスがバプテスマ(洗礼)を受けた後で、しかし福音をのべ伝え始めるまでのその間に、悪魔の誘いを受けて、これをしりぞけ、ブッダが成道の直前に同じくマール(魔)の試練を受けて、これを降したというイエス伝、仏伝は、決していわれなきものではない。そしておよそ悪魔との対決を経て初めて真の宗教家になりうるということは、何もイエスやブッダにのみ固有のことではない。それは何人にとっても、徹底した宗教的自覚に到達するためには、不可欠な課題である。」と述べている。

魔についての自覚について、「どこまでも虚妄を意志し、徹底的な破壊を意志する如き自覚である。神をも欺き、神をも殺さんと意志する如き自覚である。そこには虚妄者、破壊者、欺瞞者としての相がある。それは汝としての神が真実を意志し、創造を意志し、大いなる愛を意志したのに対して、魔の立場がそのような神の立場を裏返しとして自覚されていることの、当然の帰結である。したがって汝としての神は、創造主、救済主、贖い主としての相があったと同様、悪魔には虚妄者、破壊者、欺瞞者としての相があるということも当然の帰結といわねばならぬ。」という。

また阿部は宗教的自覚の徹底という宗教性発達の究極的な目標として、仏教とくに禅の悟りの立場から「真の無相(形の無いもの)に達するには、神の立場を裏返した悪魔の立場をさらに裏返すことを契機としてえられる自覚、すなわち神に非ず悪魔に非ず、仏に非ず魔に非ずという自覚を通して現れる。」と述べている。

ここで考えておきたいことは、阿部のいう「神の背後の無の世界に魔がある」というのは、宗教的自覚による境涯は、高次になればなるほど、それに伴い、神には到底及ばないが、かなり相当の知識や能力を持った魔が現れてくるということである。そこでそこに出てくる苦悩を克服することで、より高次の宗教的自覚がえられ、より高次の境涯と人格がえられるのではないだろうか。こうして見ると悪魔とか魔という存在は、私たち人間にとって単に排除すべき、いとうべき存在ではなくて、私たちが神性や仏性に気づき、それらが人格上に顕現するために、私たちにひそむ虚無、虚偽、欺瞞などを克服するために、そして真実にして愛や慈悲に満ち満ちた崇高な世界が現れるように、私たち人間が不可避に直面して、克服すべき存在ではないだろうか。

幸福否定治療論では、本心は真実を探究し、自覚しているが、内心は真実をつかめないように、意識にのぼらないように隠蔽する。そこに抵抗が生じて、いろいろな反応が生ずる。例えば心理的原因によって腰痛が生じても、その原因を思い出させないために、腰痛という心身症的症状を引き起こし、その注意の焦点をそらしてしまうのである。したがって腰痛の身体的原因と思われるものを探して、その治療をしてもうまくいかないのである。本心は幸福(喜び)を認識しているが、内心は幸福を否定しようとする強い意志を持つ。すなわち本心は自分にとってプラスの方向に働くが、内心は自分にとってマイナスの方向に働き、意識を思い通りに動かそうとする。また本心はいわゆる全知全能ともいうべきものである。これに対して内心はそれに及ばないが、かなり高い知識と能力を持つ。そして自分の思い通りにしようとして意識を利用する。本心は愛、慈悲、思いやりを実現しようとするが、内心は愛や慈悲に見せかけて、人を不幸にする。こう考えると、本心は神であり、内心は悪魔または魔と呼んでもよいと思われる。神や悪魔(魔)が、外部から働きかけるように思われても、それは私たちの本心と内心に対応していると思われる。しかし悪魔(魔)は宗教的自覚が低いから働くだけではなく、より高い自

覚ができ、神や仏の自覚ができるようになって、それに相応する悪魔(魔)が現れ、その至福体験を妨げるのである。そこで、その抵抗を克服してこそ、より高次の宗教的自覚とそれに相応する境涯がえられるのである。こうして宗教性発達をとげていくのではないだろうか。

参考文献

1. 松島公望 (2006) キリスト教における「宗教性」の発達および援助行動との関連:キリスト教主義学校生徒を中心にして. 発達心理学研究,17,282-292.
2. 星野 命 (1977) 宗教意識の発達. 依田 新(編), 新・教育心理学事典. 東京:金子書房. 376-377.
3. 笠原敏雄 (2004) 幸福否定の構造. 東京:春秋社.
4. 松島公望・宮下一博 (2008) ホーリネス系教会に関わる日本人クリスチャンの「キリスト教における宗教性」発達モデルの構成. 千葉大学教育学部研究紀要,56,31-45.
5. 阿部正雄 (2000) 非仏非魔—ニヒリズムと悪魔の問題—. 京都:法蔵館.

Ⅱ. 神・仏と悪魔(魔)の関係についての補足説明

神仏と魔・悪魔の関係について、聖典や仏典、イエス伝を引用して説明する。これらには悪魔の誘いが随所に見受けられる。たとえば、イエス伝においては、イエスが荒野で40日間昼も夜も断食して空腹を覚えた時や、悪魔がイエスにこの世の繁栄を見せた際など、悪魔はイエスに誘いをかけ、そのたびイエスは悪魔を退けている。そのイエスと悪魔の激しい問答の際、悪魔は聖書の言葉を引用してイエスに誘いを掛けている。つまり悪魔の誘いのレベルが高く、誘いを受ける側が相当な能力を持って見透かさないと、悪魔の言葉通りになってしまうのである。しかし、この誘惑というのは自分で作り上げている世界であり、その内側を見て正体をつかめば、そこには決して悪魔は働かない。

釈迦伝にもイエス伝に似たような話がある。ブッダはアーナンダに「修行を完成させた人たち(如来)は、もし望むのならば寿命のある限り、あるいはそれより長い間この世に留まることができる」と三度にわたって言った。しかしアーナンダはこのことが分からず、結局ブッダに懇請しなかった。それはアーナンダが悪魔にとり憑かれていたせいだ、と言うのである。この悪魔という存在は、外に存在するものではなく、アーナンダの内心というべきものであり、それがアーナンダの本心に気づかせなかったのである。さらに悪魔は、アーナンダの留守中に、ブッダに「今こそ涅槃にお入りください」と誘いをかける。するとブッダは一度はそれを拒むものの、結局は悪魔の誘いに乗り、三ヶ月後に入滅する、と悪魔に自分の意思を告げるのである。しかしこの誘惑というのは他人からされるものではなく、自分自らが受け入れるかどうかという問題になってくる。誘惑の問題を問う時に、このようなひとつの自覚があれば、悪魔の力は問題ないに等しいと言える。

このような神と悪魔の問題は、非常に大きな問題であり、宗教的な発達や向上にも大きく関わってくると考えられる。この問題を克服してこそ、宗教性発達や成長が得られると考えられる。

Ⅲ. 質疑応答・フロア討論

岡村先生(東京基督教大学):

資料に30代男性デザイナーの事例があるが、宗教性の発達がある意味いったん逆戻りをしてしまうという現象は、かなり多くの人の間で起こるのか、あるいは一部の人に起こる心身症的な現象なのか。

恩田先生:

逆戻りの現象には個人差があり、誰にでも起こるとは限らない。心身症的症状が見受けられる場合もあるし、中には眠ってしまう場合もある。個人差はあるが、自分の意識を抑制し、自覚させないようにするという現象で、その現れ方は人によって違う。

Takahashi先生(イリノイ州立ノースイスタン大学):

幸福否定論については、伝統的な深層心理におけるタナトスの概念と類似点があるような気がしたが、幸福否定が人間の本質であるという説明がピンとこなかった。宗教の下地のない日本において、宗教的な経験を否定する気持ちがあるのは理解できるが、悟りの体験や至高経験、独創的な経験に対して、なぜ人は否定を行うのか。

恩田先生:

それはおそらく受容の問題だと思う。素晴らしい経験というものが自分の経験から離れている場合に、自分のものとして受け入れられるかどうか、という問題である。これを人は無意識で否定してしまい、否定の現象が起こる。そしてあまり素晴らしい経験だと思わず、受け入れるのにそぐわないと判断する。受け入れてしまったら死んでしまう、それほどまでに強烈な至高経験があるのではないだろうか。

その理由の一つに進化の歴史があると考えている。動物が人間に進化していくまでの歴史において、多くの種が死んでいく過程を経、命がけの苦しみを受けて成長・進化してきた。その経験が内在的にあるために、否定の原理が働くのではないだろうか。この問題については私自身もう少し研究したいと考えている。

田畑先生(白百合女子大学):

否定性は、キリスト教で言えばパリサイ主義の問題とも関係するのでは、と思う。パリサイ主義は徹底的に厳しい道徳主義で、人間を否定的な眼差しで見ている。そのようなパリサイ主義と関連付けて解釈すると、他にもいろんな宗教の中にそのような要素がある。親鸞は、喜ぶべきことを喜ばせないように妨げる心が煩惱であり、我々は本当は喜ぶべきことが喜べないでいる。だから阿弥陀仏はそういう人間を救ってくださるのだ、と説いている。否定性が、浄土真宗やキリスト教の中にもあり得るので、それを乗り越えていかなければ宗教性の発達はないのだろうと感じた。

恩田先生:

本心というのはあらゆる神のことだが、実はそれ

を否定し、その否定を乗り越えていったときに本心が自覚されてくる。そのため否定性はマイナス要素ではなく、むしろ発達を促進するひとつの手段である。内心で苦しむことによって、本心への自覚となる、というひとつの進化を遂げている。浄土三部経においては、光の世界には闇はない、と説かれている。「南無阿弥陀仏」と唱えて浄土に行ってみると、今度は蓮の花に閉じられた世界があり、長い時間をかけて花が開いて往生をする、ということが浄土三部経に書かれている。しかし蓮の花に閉ざされた世界というのは刺激が遮断されていて全く地獄と一緒だと考えられる。つまり極楽の表現をもって地獄が描かれているのである。しかし実は、より真実のもの、より高いもの、より明るい世界へと向かうための一つの手立てとして、闇とか魔というものが神や仏の思し召しとして存在しているのではないだろうか。つまり、悪魔も神の世界に存在していると考えられる。

Takahashi先生:

今日のタイトルの中の「発達」という概念を考えたときに、内心と本心で論じるのもひとつだと思うが、たとえばエリクソンやピアジェなどのもつと発達に絡むような枠組みから見たほうが、発達について光が当たるのではないだろうか、と感じた。

恩田先生:

それはもつともだと思う。私は発達を幸福否定の原理にあてはめて考察したが、ピアジェの調節・同化の理論を用いるのもよいと思う。さまざまな切り口があり、視点は1つではない。

Takahashi先生:

イエスが40日間荒野に出て悪魔と出会う話があったが、13年ほど前の映画「The Last Temptation of Christ(邦題:最後の誘惑)」においてその話がそのまま映像にしている。恩田先生の言われた悪魔と神の存在は実は自分の内にあるのだ、というところを突いている映画なので、お時間があればぜひご覧になっていただきたい。

森永先生(神戸女学院大学):

私はキリスト教プロテスタント系の大学に勤めており、時々キリスト教徒の方と話す機会がある。その中で、発達というのは、キリスト教にしても仏教にしても、自己受容のプロセスなのではないかと感じていた。今日、恩田先生の話聞いて、自分の心の中にある負のものを受容していく、悪魔も自分のひとつであると受容し、それを統合していくプロセスが発達なのではないか、と感じた。

恩田先生:

今森永先生が言ったように、最初はやはり受容できずにいろいろとぶつかる。そうして自分の頭の中で出来上がったものを再転していき、今までにないものと付き合っていく、というのが発達の大まかなプロセスだと思う。

要するに、認知の問題と表現の問題があり、そのレベルが違うのである。再転して、自分というものが分かった段階、自分の頭にあるものを行動として表現する段階、今度はクリエイティブに自分を作り出していく段階という3つの段階を考えると、やはりそのレベルに差があるのだと思う。それを踏まえて考えると受容の問題は非常に重要になってくるだろう。

齋藤先生(東京学芸大学):

以前たまたまアメリカの有名な「Child Psychology」というタイトルのテキストを読んでいたところ、「宗教的発達」について書かれた章があるのを見つけ、非常に驚いた記憶がある。そのころのアメリカ社会では、キリスト教徒になっていくことが発達の非常に重要な側面であったのではないかと思う。しかしその後の発達心理学の本の中からは「宗教的発達」の章が姿を消していった。そういう意味では、「宗教的発達」という言葉と、「宗教性の発達」という言葉について私は疑問を持っている。もう1つは、発達については、全体として一次元的な発達という考え方は影を薄めてきており、松島先生の宗教性発達のモデルは非常に一次元的すぎるのではないかと思う。一次元に関しても、たとえば有神論から無神論までであるとすると、宗教性は有神論のみを取り上げている。しかし、宗教に関する研究において

は、無神論まで含めた連続体として考えてもいいのではないだろうか。また、心理学の中ではスパイラルな発達を考える人が多い。宗教性発達についてもスパイラルに考えていくことが可能で、その方がより適切なのではないか。

松島先生(東京大学):

私の作った宗教性発達のモデルに関しては、齋藤先生の言うとおりに、一次元的に考えるのは限界があると思っている。ただ、「ふりかえり」の部分については少しスパイラルを示しているところもある。

また、私自身の研究でははじめ「宗教性」という言い方をしていた。しかし「それはキリスト教に限定された宗教性だ」という指摘があり、どこまで限定して説明するのかという部分を私が制限しないと、やはり心理学では実証的には無理や問題がある、ということで私の研究では「プロテスタント・キリスト教ホーリネス系教会に関する宗教性」と制限している。だからといって「宗教性」はそこだけでセーブされるものではないだろうと思う。

Takahashi先生:

齋藤先生の言われたスパイラルなモデルについて、実は私も同じことを考えていた。

「宗教的」と「宗教性」ということについては、スピリチュアリティという概念がある。最近日本で言われている占いなどのスピリチュアリティではなく、本来の意味でのスピリチュアリティという概念を持ってくると、無神論と有神論にしてもいろんな解釈が広がるのではないだろうか。

恩田先生:

私は、宗教性の究極的なもの、本質的なものをスピリチュアリティだと考えている。こういう面からも宗教性というものを見直す必要があるだろう。さらに「宗教的発達」と「宗教性発達」の違いに関して言えば、宗教心理学を訳すときに Religious Psychologyなのか、Psychology of Religionなのか、という問題もある。松島先生の場合は、宗教というものを見直すため、宗教の本質をとらえるために宗教性という概念を用いて、さらに下位概念を用いて測定し分析している。したがって「宗教的」ではなく「宗教性」ということになる。

松島先生:

「宗教的発達」は、宗教的な側面がその人のパーソナリティにどう関わるのか、という問題だと思う。日本人の感覚では、パーソナリティや精神性の形成にあたっては、宗教は副次的な要素が非常に強い。しかし、その人の中にある核・中心的側面というよりは「性」、つまり特性ということになり、その特性として発達を考える場合はやはり「宗教性発達」という表現が望ましいのではないか。またそのように考えると、実際の人間の発達を考えたと際、「宗教性」という特性を重要なファクターとして議論することができるのではないか。

工藤先生(心と身体健康コンサルタント和心リフレッシュセンター):

宗教性が高まっていく状態がある場合、宗教の種類は関係あるのだろうか。世界中に様々な宗教があるが、その種類にかかわらず、人間的によい状態になっていくのだろうか。

恩田先生:

禅宗では修行をするうちに位が上がり、師匠に証明されて指導の資格が与えられるようになる。おそらく発達というものを考えているのではないかと思う。

私は浄土教の信仰があり、修業もしたが、人と話しその境涯を見ていると、相手の境涯の程度が分かる。しかし、境涯の高い相手だとなかなか分からない。つまり境涯が上の人とは下の人についても分かるが、下の上の人については分からない。その基準やそれをどう見ているのかという研究はあまりされていないが、実践的には、それぞれの宗派・宗教は同じように発達の段階を考えているのだろうと思う。

松島先生:

キリスト教の場合でも、教団教派等によって変わってくるが、キリスト教に関してはその側面は強い。私の所属する教団はとくに宗教体験や高次の体験に関しては厳しい。

今回は宗教性の発達ということで恩田先生に講演していただいた。日本人は「私は無宗教だ」と言うが、私としては外在的な宗教教団ではなく、やはり宗教性という特性というものがあると思う。宗教性というのは各人それぞれが持ちうるものだからこそ、宗教性という問題を発達の視点で議論や検討ができる。宗教性の有無ではなく段階や違いについて研究し議論していくことで、この研究に意義を見出していきたいと思う次第である。

表1 全事例における各局面のエピソード(⑨, ⑫, ⑬-1を抜粋): 松島・宮下(2008)

<p>⑨高次の回心体験(きよめの体験)・「信念」</p> <p>7人の事例全てが高次の回心体験(きよめの体験)をしている。そして、高次の回心体験(きよめの体験)をするということは、それだけキリスト教に傾倒するわけだから「信念」の深まりが存在する。C、F、Gについてはその後、高次の回心体験(きよめの体験)に対しての疑問や不安などが生じている。しかし、この3人も高次の回心体験(きよめの体験)をした時点においては、高次の回心体験(きよめの体験)をしたとの確信があるので、その事実に基づいて7人全てが「きよめの体験をした」と位置づけることに問題はないと思われる。</p>
<p>⑫深いキリスト教理解</p> <p>「気づき体験」の深まりによって、キリスト教理解が深まっていき(「信念」)、それに基づいた実践へとつながっていく(「効果報酬」・「効果責任」)。</p> <p>A: 将来像が明確になるなど、自分の体験を深く理解し、自分の生き方へと結びつけるようになる。</p> <p>B: 神学校へ入学し、今までのキリスト教生活とは異なる学びや生活を送り、深いキリスト教理解へとつながっていく。</p> <p>C: Z神学校へ導かれたことを、卒業前の1つ1つの経験から神の導きと理解する。Z神学校で受けたものを、牧師になってから、一度拭い去って、整理したいと感じる。</p> <p>D: 対人関係によるトラブルにより、休学となり、今までとは異なる捉え方や自らと向き合おうとする傾向が現れる。また、新たな神学校で新たな学びをして自我関与が高まる。</p> <p>E: 卒業論文で「黒人神学」について学び、自分なりのキリスト教理解を深める。また、神学校で、多くの経験を通して、牧師としての核、基本を学ぶ。</p> <p>F: 2つの教会の開拓伝道に主体的に関わる。主体的なキリスト教生活として率先して行動する。</p> <p>G: 結婚の決定やアメリカでの牧師としての任命が決定し、今まで以上に、キリスト教生活としての生き方について考えさせられ、神と向かい合う機会が増す。今までの経験、知識が整理されていく。また、多くの聖書の言葉により、神に立ち返る機会を得る。</p>
<p>⑬-1(現実定義の)自我の中心領域への定着</p> <p>この局面では、各事例においてばらつきが出てくる。キリスト教生活としての自分をそれだけ受け入れているか、また、対峙しているかという面が重要な要因となる(「信念」)。特に、この段階を経ているA、B、Fの事例をみると、「宗教性」が成熟していく過程で、自分だけではなく周囲への配慮やキリスト教生活としての深い関わり方ができるようになっている(「共同体」の深化)。</p> <p>A: 舎監との関係から、キリスト教的な「従う」を学び、対人関係の見方が変化し、深まっていく。</p> <p>B: 神学校での寮生活を通しての孤独感から神との関係が深まる。友人の事故から祈りの姿勢が変化する。</p> <p>C: 牧師としての教会生活でのつまづき。今まで歩んできたキリスト教生活への省みーキリスト教生活としての再形成がこれからの課題となる。</p> <p>D: 一歩引いた、形式的な関わりになっている。しかし、休学からの一連の出来事を通して、主体的に受け止める方向へ進みつつある。</p> <p>E: 赴任した教会の教会員と分裂してしまい、牧師を辞めることになり、キリスト教生活としての自分が見えなくなってしまう。</p> <p>F: 献身に向けての準備。神学生として派遣された教会の信徒と接することによって、あらためて自分のいたらしさを知り、自分自身を深めていく。</p> <p>G: 牧師としてやっていくことへの不安を持っている。今までの自らの信仰を再確認する必要がある。</p>

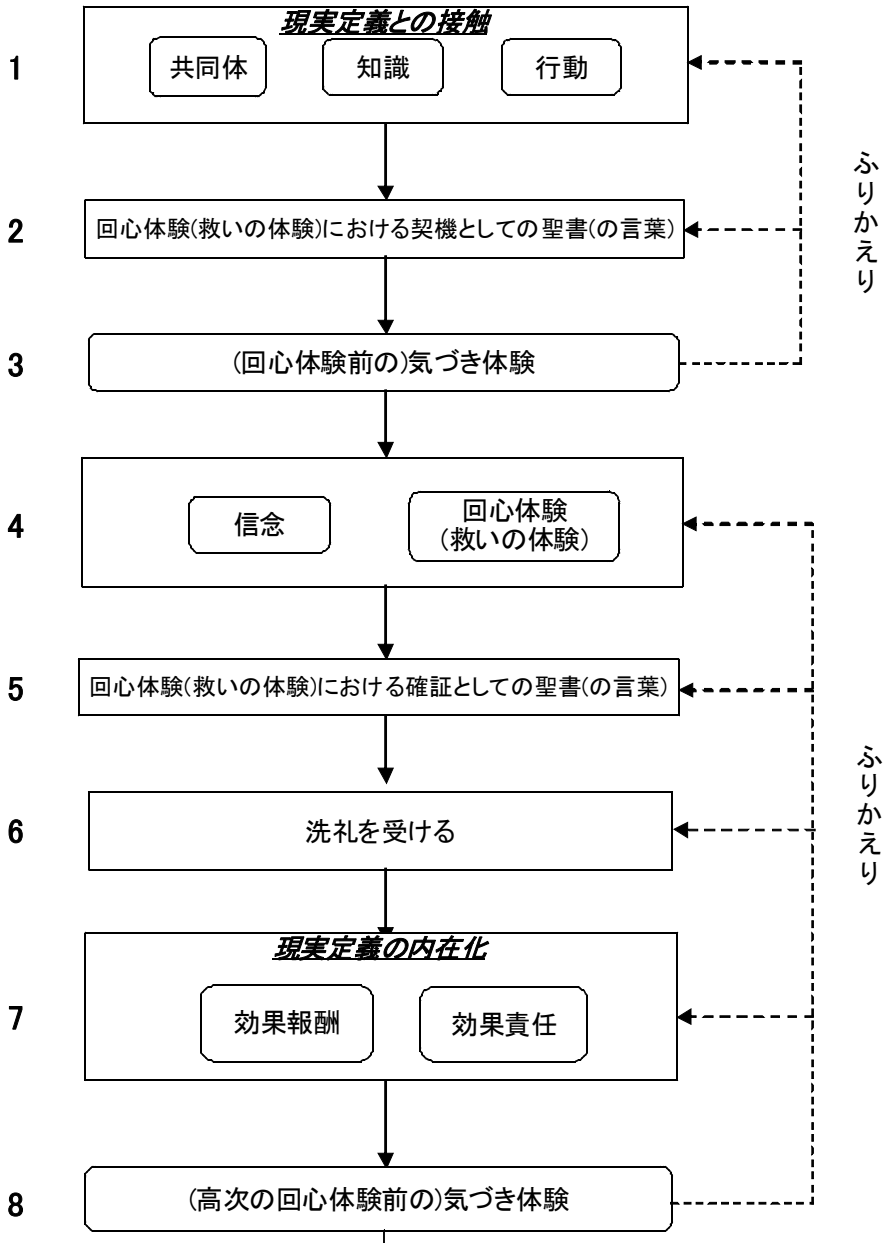


図1 日本人クリスチャンにおける「宗教性」発達モデル(松島・宮下,2008)

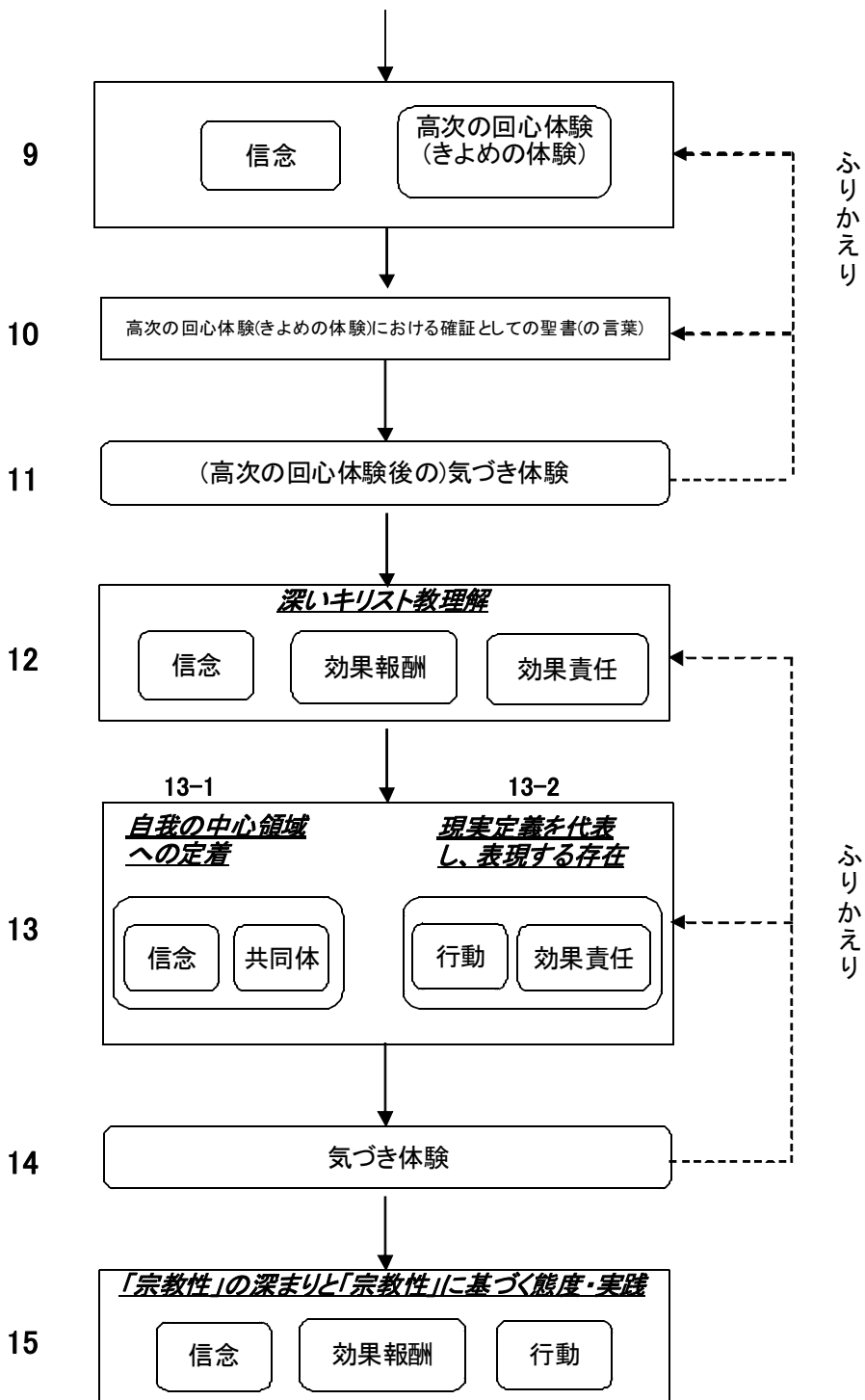


図1 日本人クリスチャンにおける「宗教性」発達モデル(松島・宮下,2008):つづき

再び宗教性発達の問題点を探る

恩田 彰(東洋大学名誉教授)

このたびの講演は、「宗教の本質にふれる根本問題に直面することから、極めて難しい問題である。」と述べたが、今回は話して見て、やはり難しい問題であると思った。

宗教性研究における宗教性の捉えにくさの問題について述べたが、これは宗教的体験はできても、その自覚や意識化には難しさがあるのではないだろうか。すなわち宗教性とくに宗教性発達には、その宗教的体験はできても、それを心の中で受容することに抵抗が生ずるのではないだろうか。そのメカニズムについて解明しようとしたのであるが、いまだに本当のことはよく分からないている。

この発表は笠原敏雄の幸福否定治療論に基づいて考察したが、この治療理論は、私にはいまだに十分には分かっていないのである。

人類は、その生物としての始まりから進化の歴史を通して、生命がけの進化と発達をとげてきた。そこで私たちの深層心理では、釈迦は「一切皆苦」すなわち何事も思うようになることは一切ないことを説いている。このことは私たちは無意識に身につけており、幸福を求めているいろいろなことと思うようになるような時でも、そうなことを拒否して、自分に不幸なことを起こさせて、自分が不幸であることを納得させようとしているのではないか。私も七年前に約一年間の腰痛で苦しんだことがある。当時二、三人の整形外科の医師の診断と治療を受け、何人かの指圧師の治療を受けたが、治ることはなかった。その時ニューヨーク医科大学臨床リハビリテーション医学科教授のジョン・E・サーノ(John E. Sarno)の本を読み、首や肩、腰、臀部の痛みの原因は、抑圧された不安や怒りなどの非常に不快で苦痛に満ちた感情であり、それから本人の注意をそらすために、身体的苦痛を引き起こしているという事実があることを知り、2004年にそれを実証するために、長年にわたり、初めは統合失調症その後主として心因性疾患を対象として心理療法を行っている

笠原敏雄から週1回治療を受けることになった。そうしたら3ヶ月後にその腰痛が治り、その後再発していない。それから彼の提唱する幸福否定論を学ぶために、週1回、治療の理論と技法の指導をうけている。しかしそれ以前に私が学んできた精神分析的心理療法とこの幸福否定治療論との整合性はまだ得ていない。かなり分かってきたが、まだ十分とはいえない。

人間の心の深層にある本心と内心との関係は、本心が宗教でいう神なら、内心は魔とか悪魔と呼ばれるものに相当すると述べた。この関係をイエス伝や釈迦伝に求めて見よう。

イエスは、バプテストのヨハネから洗礼を受けた後、悪魔の誘惑を受けた。例に導かれて荒野に行き、40日間昼も夜も断食して空腹を覚えられた。誘惑する者が出て来て、「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ」と。するとイエスは「『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある」とお答えになった。次に悪魔はイエスを聖なる都(エルサレム)に連れて行き、神殿の屋根の端(はし)に立たせて言った。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。『神があなたのために天使たちに命じると、あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える』と書いてある。」と誘いをかけた。イエスは「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある。」と言われた。更に悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、「もしひれ伏して私を拝むなら、これをみんなあなたに与えよう」と言った。すると、イエスは言われた。「退け、サタン。『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』と書いてある。」悪魔は離れ去った。すると天使たちが来てイエスに仕えた。(マタイによる福音書)

ここで「と書いてある」とは、イエスが旧約聖書にあることばを引用して述べたものである。ところが悪魔も旧約聖書にあることばを引用しているの

である。その点悪魔の知識と能力は、聖書の言葉を用いるほどであるから、神には到底及ばないものの相当に高いことがうかがえる。そこで信者の宗教性の自覚と宗教的行動は、それに相当するほどの能力を持った悪魔が現れても、その正体を見抜き、その実力を制御しうるほどの能力を持っていなければならないのである。

仏教にも釈迦が悪魔の誘惑を受けた話が伝えられている。釈迦は出家してから6年間の激しい苦行に費やし、身体がやせ衰えてしまった。その時悪魔が現われ、「あなたはやせていて、顔色が悪く、死に近づいた。生きなさい。命があつてこそ諸の善行をなすこともできるのだ。…あなたはヴェーダ学生として、清らかな行いをなし、聖火に供物をささげてこそ、多くの功德を積むことができる。苦行につとめはげんだところで、何になろう。」と。釈迦は「怠け者の親族の、悪しき者よ。汝は世間の善行を求めてここに来たのだが、わたしにはその善行を求める必要はない。…汝は軍隊をもって私を攻撃しようとしている。しかし私はこれを迎え撃って戦おう。私は汝の軍勢を智慧をもって打ち破ろう。私はこのように安住し、最大の苦痛を受けているのであるから、わが心は諸の欲望をかえりみることがない。見よ、心身の清らかなことを。汝の軍隊とは、欲望、嫌悪、飢渴、愛執、ものうさや睡眠、恐怖、疑惑、みせかけと強情である。これらは勇者でないと、かれらに打ち勝つことはできない。私は打ち勝って楽しみを得ることができる。」と。悪魔は「われは7年間も世尊に一步一步ごとにつきまとっていた。しかしよく気をつけている正覚者には、つけこむ隙をみつけることができなかつた。」と、悪魔は消えうせたという。

悪魔は釈迦をどのように誘惑したかという点、中村元は次のように述べている。第一は、健康を保つ身を全うせよと。第二は、ヴェーダ学生として独身の清らかな行いを保ち、次に家長として聖火に供物をささげてまつりを行い、多くの功績を積むというバラモン教徒の道である。ところが釈迦は、このバラモン教の道、すなわち世俗的、慣習遵奉的な生き方を拒否したのである。そして改革的なウパニシャッドの立場から、内面的精神的

な修行によって自己の心身のセルフコントロールを実現しようとしたのである。

釈迦はアーナンダとともに最後の旅に出られたが、その時悪魔の誘惑を受けられた。ブッダ（釈迦）はアーナンダに「修行を完成した人（如来）は、もしも望むならば、寿命のある限り、この世に留まるであろうし、またそれよりも長い間留まることができるであろう。」といった。しかしアーナンダは、このブッダのいうことが洞察できなくて、多くの人々や神々の利益や幸福のために、寿命のある限り、この世に留まってくださいと懇請しなかつた。それはアーナンダが悪魔にとりつかれていたのである。以上のことをブッダはアーナンダに三たび告げられた。しかしアーナンダは、ブッダのいうことがわからなくて、ブッダに懇請しなかつたのである。

アーナンダが留守をしているときに、悪魔が近づいて、ブッダに言った。「導師よ、いまニルヴァーナ（ネハン）にお入り下さい。今こそ導師がお亡くなりになるべき時です。」と言った。するとブッダは悪魔に対して「私の弟子たちが、よく身を調べ、法に従って行い、師の教えをよく保ち、人によく法を説くことができないなら、まだネハンに入らないであろう。」と。すると悪魔は「導師の修行は完成され、法を多くの人々に説かれています。今こそネハンにお入り下さい。今こそお亡くなりになるべき時です。」と言った。するとブッダはいまから3ヵ月後に入滅するであろうと悪魔に告げられた。

このことをアーナンダは聞いて、ブッダに寿命のある限り、この世に留まって指導して下さいと懇請したが、ブッダはもっと前にしっかりと頼んでおくべきだったと言われた。そしてブッダは修行者たちを集められて、3ヶ月後に亡くなることを宣言し、怠ることなく、しっかりと修行を完成させなさいと説かれたという。

このようにして釈迦はネハンに入られたというのである。釈迦は悪魔の意図は十分に分かっていたと思う。しかし御自分の御使命が達成されたことを自覚してネハンに入られたものと思う。悪魔は釈迦の御使命や御意図を見抜いており、アーナンダに働きかけ、そして釈迦の弟子の指導と人々の教化の行動を邪魔し、ネハンに入るように

誘ったのである。まさに悪魔の悪知恵のすごさに驚きと恐ろしさを感じる。

悪魔は自己の外にある存在として、自己に襲ってくる客観的存在として思いがちであるが、実は自己の中にある内心が作り出している側面があることを見落としてはならない。自己に存在する内心は、自己の本心が真実を知っていること、人々の救済という慈悲の心があることが意識にのぼらないように隠蔽してしまうのである。そこで私たちはそうした自ら作り出す幸福否定のメカニズムを察知して、自己を不幸に陥れる働きを克服することで、より高次の宗教的自覚とそれに伴う至高経験を獲得していくのである。

「マタイによる福音書」によると、イエスは司祭長や民の長老たちによって、イエスを捕え、殺そうと相談していた。それをイエスは察知していて、「人の子は、十字架につけられるために引き渡される。」と予言していた。イエスは最後の晩餐で、十二人の弟子のうち一人が自分を裏切ろうとしていると言われた。またその席でペテロに鶏が啼く前に三度私を否定するだろうと言われた。その時ペテロはそれを否定するが、実際にはそうだったのである。それからイエスは、弟子たちと一緒にゲッセマネという所に来て、神に「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかしわたしの願いどおりでなく、御心のままに。」と三度も祈られた。それから弟子のユダがイエスを約束通り司祭長や民の長老たちがつかわした群衆に引き渡した。それからイエスは最高法院で大祭司のもとに律法学者や長老たちの集まっている所で裁判を受けた。彼らはイエスを死刑にしようと思っ、イエスにとって不利な偽証を探したが、見つからなかった。次に大祭司が「お前は神の子キリストか。」とたずねた時、イエスは「それはあなたが言ったことです。しかしわたしは言うておく。あなたたちはやがて、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に乗って来るのを見る。」と。すると大祭司は、「神を冒瀆した。これでもまだ証人が必要だろうか。諸君はどう思うか。」と。人々は「死刑にすべきだ。」と答えた。ペテロは外にいたが、一回は一人の女中、二回目はほかの女中にイエスと一緒にいたことを指摘され、

三回目は他の人々から同じように指摘されたが、それらを否定した。イエスのおことば通り、三回も否定している。祭司長と民の長老たちは、イエスを総督ピラトに引き渡した。その頃イエスを裏切ったユダは、後悔して首をつって自殺した。イエスは総督ピラトから尋問を受けた。しかし何もお答えにならなかった。総督は祭りのときに民衆の希望する囚人を一人釈放することになっていた。そのころ(イエス・)バラバという悪名高い囚人がいた。ピラトは民衆に「どちらを釈放してほしいか。(イエス・)バラバか。キリストといわれるイエスか」と。祭司長や長老たちは、バラバを釈放して、イエスを処刑してもらうように民衆を説得した。そこで民衆は「バラバを釈放して、キリストといわれるイエスを十字架につけろ。」と叫び続けたので、ピラトはイエスを十字架につけることにした。

イエスはゴルゴタという所で、十字架につけられた。二人の強盗がイエスといっしょにその左と右に十字架につけられた。人々は、「神の子なら、自分で救ってみろ。そして十字架から降りてこい。」とののしった。祭司長、律法学者や長老たちも、同じようにイエスを侮辱して「今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば信じてやろう。神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。」と同じように言った。一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをののしった。

昼の12時に、全地は暗くなり、それが3時まで続いた。3時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになつたのですか。」と。その後再び大声で叫び、「ルカによる福音書」では、「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」といった後、息を引き取られた。その時神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返つたという。

夕方になってヨセフという金持でイエスの弟子が、ピラトの所に来て、イエスの遺体の引き渡しを願って受け取り、自分の墓の中に納めた。祭司長たちとファリサイ派の人たちが、ピラトに願い出て、墓石を封印して、その見張りに番兵をおいた。

安息日が終わって、週の初めの日の明け方、マグダラのマリアともう一人のマリアが墓を見にいった。すると大きな地震が起こって、主の天使が天から降って近寄り、石をわきまがして、その上に座った。その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった。番兵たちは恐ろしさのあまり、ふるえ上がり、死んだようになった。天使は婦人たちにいった。「恐れることはない。イエスはここにはおられない。かねていわれたように復活なさったのだ。遺体の置いてあった場所を見なさい。それから急いで行って弟子たちに告げなさい。『あなたの方が死者の中から復活された。そしてあなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。』」と。婦人たちは恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走っていった。

ユダヤ教の指導者である祭司長や民の長老たちはイエスを殺そうとした。そして不当な裁判でイエスを神への冒瀆罪にして、イエスをローマから派遣されていた総督ピラトに引き渡した。ピラトはユダヤ教の指導者がイエスを渡したのは、同じ宗教家として「ねたみのためだ。」と分かっており、イエスを十字架につける罪ではないと判断していたが、群衆の暴動を恐れ、群衆の気持ちを満足させようという自己保身のため、イエスをむち打ち、十字架刑に処するのである。

イエスを裏切ったユダは、その裏切りの理由は金銭欲のほかは不明といわれる。「ヨハネによる福音書」によると、サタン(悪魔)がユダの中に入ったと書いてある。祭司長や民の長老たち、ピラト、群衆、十字架につけられた強盗たちなどのイエスへの迫害の行為には、悪魔すなわち内心の働きである自己の権力欲、保身欲、自分の思うようにしようという欲望などを実現しようとする傾向が見られる。またペテロを代表とする弟子たちが、自分たちもイエスと同様にとらえられ、殺され

るという恐怖から、自分たちの先生を見捨てた行為にも悪魔のしわざが見られる。

次にイエス自身のこの世における最大というべき苦悩と苦痛の体験である。イエスはすでに「人の子は十字架につけられるために引き渡される。」と自己の死を預言しており、弟子たちの裏切りを予知しておられた。そしてゲッセマネで、その死を避けられるように神に祈っている。そして最後に十字架上で、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。」という、その全身全霊の苦悩と苦痛を神様に直接に訴えられている。イエスは人間の罪の償いのため、その罪と罰を一身に引き受け、人類の罪を取り消し、人類を救済するという崇高な御使命を自覚され、それに伴う至高経験を体験しておられたからこそ、その至福を否定する形で、自己の命を捧げるという苦悩と苦痛を主体的に体験し、それらを受容し、本心が示す神の国に帰られたのである。前述の幸福否定治療論からすれば、これは宗教史上今までに見られなかった究極的な幸福否定の状況が出現したのではないだろうか。

参考文献

1. 笠原敏雄 (2004) 幸福否定の構造. 東京: 春秋社.
2. ジョン・E・サーノ著(長谷川淳史監訳・浅田仁子訳) (2002) サーノ博士のヒーリング・バックペイン. 東京: 春秋社.
3. 共同訳聖書実行委員会 (1987) 聖書(新共同訳). 東京: 日本聖書協会.
4. 中村元 (2006) ゴータマ・ブッダ—釈尊伝—. 京都: 法蔵館.
5. 中村元訳 (1980) ブッダ最後の旅—大パリニツパーナ経—. 東京: 岩波書店.
6. 佐藤研編訳(2005) 福音書共観表. 東京: 岩波書店.

記憶よりもさらに深き刻印

田畑邦治(白百合女子大学)

恩田彰先生のご講演で、人間の「本心」とは別に、自分の幸福を回避したり、否定しようとする「内心」が潜在していること、本心では幸福を感じていても、それを内心が隠蔽し、意識化しないように工作する、といった説が紹介され、その二つの心の働きが宗教性発達にダイナミックに作用している、というご見解をうかがった。宗教哲学に関心を持ってきた私には、この見解は、これまでの自分の小さな宗教体験を始め、ヨブ記やイエスの荒野の誘惑など、聖書の中の神と悪魔の問題、さらにドストエフスキーの小説の場面などを想起させていただく機縁となって、とても刺激的なものであった。

ところで、最近、痴呆のご主人を介護するご高齢の婦人からいただいた手紙の中で、この本心と内心にどこかで通じていると思われる話しを知ることができた。その中心部分は次のように書かれていた。

(ご自分の終戦時の体験を述べたあと)今アルツハイマーの痴呆がすすみ、赤ちゃんのようになった主人の中にも、軍人として南の島で戦友を失い、敗戦後もジャングルの奥地に追いつめられてほとんどの戦友が無惨に死んでいく中、生きて内地に帰った罪責感を深く深く心の底に沈め、私にも語ることなく生きた九十歳の老残の日々であることを介護する中で思い知らされました。雨が降りますと家の庭に飛び出し、服を脱ぎ、口を開け、天を仰いでいる様は、ジャングルの中で降るスコールが唯一の飲み水であり、シャワーであったことを、そして、庭に意味もなく穴を掘るのは、死者を埋め、腐敗を防ぐ作業であること。痴呆になっても、遠い過去の戦争の無間地獄が主人の中で続いている、そう思いますと余りにも哀れで、この心の底の深い砂漠を最期まで共に歩いてい

こうと介護の限りない疲れも消えてまいります。(以上原文のまま)

戦後封印していた戦争体験の地獄の記憶。しかし、人間の痛烈な体験は、意識に託される記憶よりも深く、いわばからだの心底に刻印されているのであろう。今、理性的意識の閾値が低下している中で、その最も深い痕跡が、雨に走らせ、穴を掘らせる。

この元軍人にとって、戦争のことは、戦後の幸福の中ではとても語るができないことであつたにちがいない。語り出すために痴呆が必要であつたとは、なんと残酷な現実であろうか。婦人が老々介護の果てに見出したことから、戦後世代の人間である私は、戦争とはどれほど悲惨なことであるかを教えられるのである。

私のすでにこの世にいない両親も、戦中戦後の悲惨を味わった。私たちが子どもであつた頃、終戦後の苦労話はいくつか聞かされたが、今思えば、いちばん辛かつたであろうことについては話してくれなかったような気がする。いや話せなかったのだと今になって思う。

ひるがえって、現在の私たちの生活ではどうなのだろう。変化の乏しい、ありきたりの私の人生にも、容易には語ることでないことがいくつか存在する。それも小さなトラウマのようなものであるかもしれない。まして、他者は、私のうかがい知れない深淵である。学問は言葉の営みであるが、宗教心理学とか宗教哲学といった分野においては、人間のこのような沈黙の領域の前でたじろぎを覚えないわけにはいかない。記憶よりもさらに深い刻印にどのように向かい合えばよいのだろう。手紙を下さつた婦人のことばを繰り返して読みながら、考えている。

恩田先生の講演を聴いて

Masami Takahashi(イリノイ州立ノースイースタン大学)

本日は日本心理学界の重鎮である恩田彰先生のお話を直に聞けるということで、シカゴへの帰国便の予定をずらし参加させていただいた。他にもこの講演会のためだけに岩手や京都から上京してきた方々もあり、恩田先生の多岐に渡る影響力を垣間見た。また、宗教性の発達研究は先生ご自身のご専門分野ではないのかかわらず、これまでなされてきた数々の研究のなかで先生が現在、最も興味を持っている分野であるとおっしゃったことは、宗教心理学を研究しているものにとっていささかの励みとなった。

講演内容であるが、「宗教性発達研究の謎を探る」ということで、始めに松島(2006)等の文献を引用され、中学・高校生の「宗教性」に関する差異が高校生特有の宗教に関する疑惑や抵抗であること、また深層心理の観点から、これらの疑惑や抵抗は人間が無意識のうちに幸福を否定することが根底にあることなどを心因症の具体例を取り混ぜながら解説なされた。さらに、仏教やキリスト教に共通する「神と悪魔の対決」という課題をを経て、ヒトはより高次な宗教的自覚に至るという考え方もご提示なされた。

これらの考え方が非常に興味深かったのは「発達」と言う概念の枠組みで考えると非常に一貫性があるのではないかと思えたからである。例えば、中学・高生間の宗教性に関する差異については、認知的発達の違い(具体的操作vs.形式操作)が宗教という抽象的概念に対する考え方に影響を及ぼしているであろう。また「神と悪魔の対決」にしても、そこにはエリクソンのいうようにdystonicな可能性(非信頼や自我の混乱など)は否定するのではなく、それら「ネガティブ」な側面を心理社会性の一部とみなすと言う考え方も共通している。恩田先生はこれに関して次のように述べられている。「…こうして見ると悪魔とか魔という存在は、私たち人間にとって単に排除すべ

き、いとうべき存在ではなくて、私たちが神性や仏性に気づき、それらが人格上に顕現するために、私たちにひそむ虚無、虚偽、欺瞞などを克服するために、そして真実にして愛や慈悲に満ち満ちた崇高な世界が現れるように、私たち人間が不可避に直面して、克服すべき存在ではないだろうか。」さらに齋藤先生が講演後ご指摘なされたように、このプロセスは更なる高次元に向かう"open spiral"であり、この考え方は弁証法的な発達理論となんら変わらないのではないだろうかと感じた。

ただ、人間が無意識のうちに幸福を「否定」という既存の深層心理に関連した考え方については多少、日本の文化的な影響もあるのではないかと感じた。というのも最近の欧米文化では人々が根拠もない「幸福の否定の否定」(例: ポジティブ心理学)に走っている傾向があるからである。確かにコーピングの文献等では、現実を自分のいいように解釈するほうが精神的健康に良い影響を与えるという結果も出ているが、最近はこの考え方が極端に増えてきており警鐘を鳴らす専門家も少なくはない(例: J. Norem, B. Held)。そういう意味では恩田先生のおっしゃる「幸福の否定」は「幸福の否定の否定」の否定であり、結構新しい視点であるのではないかと思った。

今回の講演会は講演後の質疑応答を一時間ほど取っており、通常より中身の濃い討論がなされたと思う。それでも質疑応答の一番最後に宗教性とスピリチュアリティの関係に言及された時点で時間切れとなり非常に残念であった。最後に、恩田先生がおっしゃるとおり非常に難解な概念ではあるが、宗教の心理的側面の研究を今一度考え直すのに大変貴重な経験をさせていただいたことに恩田先生ともども主催の松島先生にも感謝の意を表したい。

宗教性発達の意味と G/T を用いた研究

岡村直樹(東京基督教大学)

6月の宗教心理学研究会では、恩田先生の大変貴重なご講義を拝聴する機会が与えられとても感謝でした。キリスト教のコンテキストにおける宗教性発達の研究に携わる者として、多くの刺激と示唆を受けました。特に「宗教性」という言葉の持つ広さや捉えにくさについて語られた前半の部分では、その問題の大きさを改めて深く思われました。それは私のように主に宗教者の立場から発達を考える者がまずぶつかる大きな壁であり、たとえその壁を何とか乗り越える方法が見つかったとしても、さらにその後宗教、宗派、さらには文化による前提や認識の違いという壁が立ちほだかります。

私自身が教育を受けた北米では、ジェームス・ファウラー (James Fowler) の「信仰発達論」(faith development theory) が、キリスト教における宗教性発達研究の中核を成すひとつの理論として広く受け入れられ、数多くの研究や教育がその理論に基づいてなされています。神学者でもあるファウラーのユニークさは、宗教的な成長と心理的な成長を別々なものとして区別するのではなく、「信仰発達」というひとつの枠組みの中に両者を入れて考えて発達を考える点にあります。ファウラーは「信仰」を、いわゆる伝統的なキリスト教の用語としてではなく、もっと「宗教性」に近いユニバーサルなものとして再定義します。また宗教性と心理性は、同じテンポで向上するのではなく、時にはバラバラな上下動を繰り返しながらも、相乗効果を得つつ発達するとしています。言い方を変えれば、例えば、宗教性と心理性の発達を別々のものとして見るならば、個々の宗教性に発達とは逆方向へ向かう動きや、発達への抵抗が認められるような時でも、ファウラーの言う「信仰発達」の枠組みの中で見る場合、それらは必ずしも逆行や退化ではなく、発達へ向かう一連の動きの一部分と見なされることもあるということです。

一方で、それはファウラーの持つ発達の概念

からもわかることですが、彼の「信仰発達論」は、ピアジェに始まり、エリク・エリクソンやローレンス・コールバーグに受け継がれてきた、ある意味伝統的な発達 (development) の概念に裏打ちされています。したがってそこには西洋文化圏で発展した発達理論に対する似通った批判が常につきまといまいます。白人文化のバイアスや、キャロル・ギリガンによって指摘された男性中心的考えのバイアス、さらにはキリスト教的な宗教観、人間観のバイアス等です。この部分については恩田先生が、ご講義の最後の部分で間接的に触れて下さいました。

「宗教性」の厳密な定義や、特定の発達理論の上に成り立たせる研究ではなく、「これは宗教性の成長なのではないか？」と直感的に感じさせる事象を出発点とした研究は出来ないだろうかと模索する中で、私なりにたどりついたのが、バーニー・グレイザーとアンセルム・ストラウスによって形成されたグラウンデッドセオリー (Grounded Theory : G/T) でした。フッサールの提唱した「現象学的還元」の理念に基づく研究方法である

G/T では、理論はグラウンド、つまり事象の起こる現場から沸き上がるデータに基づいて帰納的に構築されなければならない、そうすることによってのみ理論が現実結びつくのであるとします。したがって G/T は「前提」や「予見」「仮定」を嫌います。また、「質的研究」の一分野でもあるこの方法では、研究において、横に向かう量的な広がりではなく、下方向に向かう質的な深さを求める方法論です。研究対象の量的縛りに対するおおらかさや、社会の個々の多様性、文化的文脈に対する適応性を有する部分が、その利点として挙げられることの多い G/T ですが、私にとっての最大の利点は、「宗教性」や「発達」の定義付けから宗教性発達の研究を開始するのではなく、それらを棚上げ、あるいは研究対象に委ねる形で研究に取りかかる事ができるという所にありま

す。例えば個々の研究対象者が感じている「宗教性」について詳しく聞いたり、彼らの身の上を起こった宗教心の「発達」の経緯を、時間をかけて多方向から観察したりすることが、研究データ収集と理論構築の中心部分になり得るからです。

恩田先生のご講義を拝聴しながら特に感じたのは、今回のご研究の中核をなしていた部分が、

ケーススタディーを含めた、先生の詳細な人間観察と深いご洞察の上に成り立っていたという事実でした。日本においてはまだ完全に市民権を得た研究論とは言い難い G/T ですが、この方法を用いた研究にとって必要不可欠な、個々の人間に対する観察眼と洞察力を、恩田先生に習って、もっと磨かなければならないと思わされました。

宗教再考の夏

工藤弘憲(心と身体健康コンサルタント和心リフレッシュセンター所長)

六月の下旬とはいえとても暑い日だった。はるばる東北の田舎から都会の初めての駅に降り立った。誰に路を尋ねることもなく地図を片手に多分そうだろうと思う方向に歩き出した。橋を越えて少し行くと路は次第に上り坂になり、まもなく会場の白百合女子大学の校門が見えた。門をくぐると綺麗に手入れされた庭、うっそうとした木立のアプローチは先ほどまでの陽射しを覆い、さらに行く目指す会場の手前にチャペルが目に入った。思わず中に入り暫し一人静かにその雰囲気に入った。

一瞬自分の中で「今何をしているの？どこに向かっていての？」の問いが頭をかすめた…。たまたま、お世話になっている日本心理学会のホームページで宗教心理学研究会主催の講演会を知り、自分なりに遠い昔に結論を出して、その後はまったく触れることの無かった宗教の世界にまた、足を踏み入れようとしていた。

親々の信仰から神の存在を知り、神がこの世や人を創造したのであれば、それは何らかの意図によるものと思われ、その教えの基に生きて行くのが人としての務めではないのか…の思いのもと、よそにも違った神の存在もあることから、生涯の自分の生き方を託すものとして広く宗教(神)の探究をすることを思い立った。その初めは中学の頃だった。NHKのラジオやテレビの“宗教の時間”を朝早く起きて見たり聞いたり図書館にもよく

通った。高校は親元を離れて親の進める信仰の高校に進学しながら、お寺さんに通って参禅修行も始めた。その後、人は如何に生きればいいのか…という問いと相まって、さらに追究は進み、宗教的实践や心理的な自己改善や啓発法、古来の修行鍛錬法等も学び、大学では哲学のあと心理学を専攻した。常に自分の心身を実験台として自分の理解に向かって進んだ。そうするうちに、次第に宗教および神仏に対する自分のあり方を明らかに理解納得するに至り、20年近くに及んだ私の探究は終わった。そしてその時から既に20数年の時が流れて、今回再び宗教に関わることになった。それは、何かしら宗教という言葉の懐かしさと、直接的に宗教学というより宗教心理学というところに現職の心理カウンセラーの仕事との関連を見たからである。

宗教や神仏を追究する事は、直接そのことだけでなくその他の様々な事を教えてくれる。形而上的なことの捉え方や人と歴史の関係、そして人間関係や人の心について等々、自分と生きる世界との関係が明らかになる。私は宗教(信仰)の世界で生きることにはならなかったが、若き時に懸命に追究したことは決して無駄ではなかった。

さて、今回の恩田彰先生の公演会であるが、すばらしい先生との出会いに感謝している。先生はご講演の中で今回テーマの「宗教性発達研究

の謎を探る」について、お話の中で何度か難しい問題であるとか分からないという言葉も言っておられたが、新興宗教の教祖などの中には(新興には限らないが)、有史以来科学的にと言うか明らかかな見解が得られていないような事(形而上的な事、宇宙の果て、人類の始まり等)を、あたかも見てきたことのように説くのが通例であるが、それを求めたり信じる側が居て信仰が成り立つのでなんとも言えないが、一般に回答は誰も分からないというようなことに対して、断定的な答えを下すことはそれなりに魅力的で、それが宗教の持つ特性の一面でもあり、そこに人の心理が反映されている。この点、現在の科学において未詳の事、つまり(科学至上と言うのではないが)客観的に、論理的に、実証的に解明されていない事に対して、分からないと答えるのは私の思う真の学者である。

講演の内容にふれると、ここで扱う宗教性発達とは、“その宗教の持つ性質や傾向による信仰者の向上的な変化”であり、最終的にはその宗教に染まり、その宗教者らしくなる過程の事であると思われる。信者はその信仰過程でその信仰ならではの様々な困難や障害と出会い、それらを克服していくことで、その宗教にふさわしい宗教人になっていく。その経過の中でおこる心理的な“抵抗”の存在について、笠原敏雄の感情の演技という治療法を用いる幸福否定治療論を例にあげ、この抵抗と同類の好転の否定という現象について説明された。さらにこの現象を宗教性発達の観点から、宗教性がより高次に発達するとこの現象が起こるのでは・・というところから、松島・宮下の“日本人クリスチャンの「キリスト教における宗教性」発達モデル”を例にあげ、笠原理論に基づいての説明があったが、その真実は分からないとしている。この点については、私の場合も数多くの信仰者を見てきており(研究対象としてみたのではないが)、そのうちの少数ではあるが、同じような抵抗と思える状況を見てきている。抵抗の大小やそれを乗り越えられるかどうかによって、その後の信仰の進退や信仰の深まりが違ってくものと思われる。

次に宗教的自覚における神と悪魔のところで思ったことであるが、宗教と一口に言っても、その捉え方も宗教の数も限りないもので、研究していく際にすべてを網羅することは不可能であり、どうしても研究者のテリトリーと言うか守備範囲に限定される事になる。それは仕方がない事としても、その結果を述べる際には言葉の吟味がなされなければ誤解を招くことになる。仏教やキリスト教では魔や悪魔が登場するが、阿部正雄によれば、それとの対決を経なければ“徹底した宗教的自覚とは言えない”とか“宗教的自覚に到達するには不可欠な課題”また“真の宗教家にはなれない”とまで言っているが、必ずしも魔や悪魔が登場しない宗教も有るので、真の宗教家ではない・・という宗教全般に敷衍したような言い方はできないものと思われる。

今回参加して宗教性発達に関連してある事を思い出した。宗教の実態に関する事であるが、以前ある宗教の信者がその教義について行けずに悩み苦しみ身も心も傷ついていたが、別の宗教に入信したところ、生き生きと明るくなりその後もその信仰を続けていた(教義だけでなく人間関係も関係するとは思うが)。また、宗教は世界宗教といえど、その始まりはその地その地の風俗習慣の中から生まれ、それぞれの人種も違い、多様なもので、いくら高尚な絶対的な教えであろうと、オールマイティではない。人によって合う宗教と合わない宗教がある。それは多くの神が存在することからも分かる。もちろんそれ以前に宗教が必要な人と必要でない人がいる。

このように、宗教によって幸せになっていく人と、その教えにがんじがらめになって身も心もボロボロになっていく人を実際見てきて思うのは、信じさせる側にも信ずる側にも個性があるので、信仰して幸せになる人はそれでいいが不幸になる人を出さない為に、神の救いが必要な人や宗教を求める人に、その人との相性のいい宗教を見つけてあげるボランティアでもしよかな・・と真剣に考えたことがある。

一般に入信の動機は身内や身近な人の勧めであり、特に精査することなくその中に入り、その

中の教育に染まりその信仰者となっていく。一旦そうなると前述の抵抗ではないが、呪縛されたかのように、そこから離れることの不安を持ったり、罰を恐れたり、自己を責めたりなどの心理を抱く者も出てくる。もちろん至福を得る者もいる。

余りにも信仰に安易に入る人がある反面頑なに信仰を拒否する人もいるが、自分の生活や人生を左右しかねない信仰に、安易に入る事は慎まなくてはならない。(もともと啓示宗教等は理性面に訴えるものではないので)できれば入信前にその宗教の事をよく知ることである。その選択においては、自分にとっての良いこと同様にリスク的なこともよく検討し、自分の性格とよく相談して、つまり、感情や利得や願望的見解等に流される事なく、客観的にその対象をそのものとして認識する事が肝心である。

これは、宗教の研究にも言えることで、常にその対象を客観的にみて宗教そのものや自分の信奉する宗教を特別視したり過大視するような事は戒めなくてはならない。またその宗教から離れた場合も同様で、非難したり敵対的な態度での研究は頂けない。自分の信仰を持つ研究者にとって、(無意識に行っている事もあり)この事は非常に難しい事だが、この意識なく進めたのでは誤った研究結果を導き出すことにもなる。

私の研究は人様に発表する為のものではなかったが、自分自身がしっかり理解納得する為にできる限り前述のようにしてきたつもりである。広く真理である神を模索する為に親からの信仰をそのまま受け継がず、また性格的に物事を常にできるだけ公平に見なければ気がすまない習慣があったので、そのようなことで無理なくできたのかもしれない。既に信仰者である親や兄弟、縁者達とは心情的な葛藤はあったが、自分の研究とそ

のような人達への信頼や愛情は別の事として研究に邁進した。

信仰の特別視や過大視に関係して次のことも言える。信仰によって辿り着くと思われる、より真実なるものや深い悟りなどの体験は一見宗教の専売特許のように思われるが、これらは宗教以外でも哲学者や武術や心身鍛錬法などでも聞かれる(辿り着く)ものであり、私は30数年瞑想やヨーガ修行を行ってきたがその世界でも聞かれるものである(ヨーガはもともと宗教的要素を含むが)。従って、宗教のみの特典とは言えない。もし、辿り着く中身が違うというのであれば、その違いはそれを行う個々の気質やパーソナリティからくるところの結果に他ならないものと思われる。宗教の宗教ならではの特典(存在意義)についてはまたの機会に譲る。

今回、ニューズレターに寄稿を・・・と言う言葉を頂いて、多忙である事と何事であれ人前に出ることが苦手の私は、お断りしようと思ったが、依頼されるかたにもいろいろ都合があるだろうと思い、神の啓示?と受け止めて承諾をした。お陰で久しぶりに宗教と向き合い、若き日に懸命に神や生き方を模索していた自分を思い出した。例年に無い猛暑の夏であったがノスタルジックな思いと共に貴重な数日であった。

最後に、今回会場においてお世話下さった田畑先生や松島先生他の暖かい応対やお茶やお菓子を用意して頂くなど、会場のアットホーム的な心地よさは他学会では経験したことがなく、何か癒されたものを感じた。今後どんなに大きな研究会や学会に発展しても、この雰囲気だけは無くして欲しくないと思った。

ありがとうございました。合掌

書評:大田俊寛著「グノーシス主義の思想」春秋社 2009年 グノーシス主義の思想—〈父〉というフィクション

根本和子

グノーシス主義は、古代のローマ帝国を中心にきわめて広範な広がりを見せた宗教運動である。一般にグノーシス主義という用語はキリスト教の「異端宗教」として広義に含意されているが、狭義のグノーシス主義はキリスト教が国教化される前のローマ帝国で最盛期を迎えた。多くの資料は失われており、わずかな著作物が発見されるまでは、キリスト教教父・護教家たちの書物からの情報に頼るしかなかった。発見された文書群にはそれぞれグノーシス主義固有の神話類型が散見するものの、「それではグノーシス主義とは一体何だったのか」という問いに明確な答えを見出すことは容易ではない。本書はそのような困難な課題に果敢に挑戦したものであり、特に日本における従来のグノーシス主義研究の在り方に、鮮烈な問題意識をもって書き綴られている。

グノーシス主義研究の場においては、荒井献氏をはじめとするキリスト教神学者の研究が有名だが、荒井氏が提示した「グノーシスの神＝本来的自己」という一つのテーゼが独り歩きし、一部ではキリスト教会ドグマとして受容されてさえいる。神学者たちは教父文書が語る否定的なグノーシス主義像の影響を少なからず受けており、グノーシス主義とえば、「傲慢」の産物であり「神」なき宗教運動であるといった、前時代的なバイアスが幾ばくかかった理解を完全に捨ててはいないのだ。

他方、心理学の立場からのグノーシス主義研究ではC.G.ユングが良く知られている。長い間、ユング派の立場でグノーシス主義を研究する人たちの間では、ユングが理解しているグノーシス主義をそのまま受け入れた上で、ユングとグノーシス主義の相似関係を語ることがあった。ところが実はユングのグノーシス主義理解は、時代的な制約も手伝って、文献学的な精確を欠いた情報に立脚している。そのような点を曖昧にしたまま語られたグノーシス主義はまさに正統派神学と

ほとんど変わりなく、さらにそこから演繹された彼らの正統派神学理解はまさに正統派の教会がグノーシス主義に対して批判する点であり、そこに大層驚いたことがあった。これはもう十数年も前の話だが、要するに双方がそれぞれ同じ投影を他者に投げかけた上で批判していたというわけである。

著者の大田によれば、ユングを含む心理学者・宗教学者たちの従来のグノーシス主義に対する多くの言説の実体は「内的妄想を開陳しているにすぎないロマン主義的解釈」であり、歴史学的実証主義を欠いている。そしてキリスト教神学者の側も、ほとんど無防備にロマン主義的宗教論を受容し、両者が癒着したまま「袋小路」に陥っていると指摘する。それ以外の方法を模索しようとして、孤立無援の状態に立つことになったこともあったと大田は述懐しているが、それは大田だけでなくかつて筆者も痛切に感じたものである。このような研究状況の中で果敢な問題意識を掲げた本書が誕生したことは、ある種の清涼さを感じさせるだけでなく、今後の研究の発展のためにも大いに歓迎すべきことと思う。

本書は、序章を含め、5つの章で構成されている。

まず序章では、グノーシス主義の諸資料の解説と、グノーシス主義を巡る諸言説を紹介しつつ、上記のような従来のグノーシス主義研究の抱える問題を列挙する。そして著者自身は、グノーシス主義の顕著な特色は、「神なる父」とは何か、父と人間の関係に関する考察であると述べる。

1章ではグノーシス主義前史を概観し、グノーシス主義を生んだローマ時代が、1. 父を喪失した時代であったこと、2. それゆえに父の探求に乗り出し、3. 失われた「わたし」の姿を見出そうとする思想的試みが繰り返されていた時代であったことを確認している。

2章では、代表的なグノーシス神話を二つ紹介し、そこに鏡モチーフが重要な役割を演じていること、その際自己を認識することの「両義性」が神話体系の中で描写されていることを指摘する。

3章は「鏡の認識」と題し、著者はここでラカンの精神分析とグノーシス主義の間に共通部分を見出し、数々のグノーシス主義のモチーフをラカンの分析理論と照合させている。グノーシス主義は鏡に映った姿を見ることによって自己の存在を認識することについて、極めて詳細な思弁を展開した。グノーシス主義は、自己と他者との間に疎遠が存在し続けることを鏡モチーフで表す一方で、父なる神の安定した「表象」を描き出すことに失敗する。

4章では、キリスト教とグノーシス主義を比較考察し、前者が新しい「父」を作り上げることに最も成功した宗教であったのに対し、グノーシス主義は否定神学を推し進め、宗教や信仰それ自体の生成論とも言うべき理論的地平を開いていったと分析する。それゆえ、人間が表象とその再編の過程が繰り返され、この世の諸表象が「わたし」を照らす鏡として上手く機能しない時代に、グノーシス主義の息吹きがそこに流れ込んでくることになるだろう、と大田は結んでいる。

はたして古代のグノーシス主義がすべて、「あなた」と「わたし」をめぐる連続的で弁証法的な自己理解を志向していたかどうかは、厳密な史実の検証が必要とされるのではないだろうか。私見ではそれはすべてのグノーシス主義文書に共通する主題ではないようにも思える。だが、グノーシス主義者が「父なる神」とは何かという問題を最後まで保留にしてきたこと、鏡の両義性につ

いて語られていることは、少なくとも現存する諸資料からは確かであると思われる。「わたし」が神と本質的に同一であり、終局では人間以外存在しない独我論という、日本で半ば定説化したグノーシス主義理解は、今後はもっと多角的な方面から検証されていくべきではないだろうか。

いずれにせよ、本書が古代のグノーシス主義の思想から、現代の問題を考察する上で非常に多くの示唆を与えてくれることは間違いない。なぜグノーシス主義が時代を超えて幾度も出現するのか。特になぜ思春期の少年たちに受容されているのか、その解明に大きな手掛かりとなることだろう。

インターネットで「グノーシス主義」を検索してみれば、アニメのキャラクターと共にグノーシス主義について書かれたサイトを散見する。それらの書き手らは、親の影響下から抜けだしつつ、異性との建設的な関係を築きあげる途上にある少年たちである。彼らの描くグノーシス主義と「わたし」は、しばしば離人感覚に似た文章でつづられているが、それは決してこの世を否定している訳ではなく、いかにしてこの世に生きるべきかという過程で「わたし」を模索する段階にある健全な精神によるものである。そのような不安定な時期を通過して、人は次第に次のステージに適応する「わたし」を見出していくのだが、その過程で躓くこともある。その時にグノーシス主義の諸問題も立ちふさがるのでないだろうか。

グノーシス主義研究の成果から、現代の宗教現象を照射する事によって何が明らかになっていくのか、今後多角的に研究が深められていくことを期待したい。

事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニューズレター第13号が発行されました。第13号も非常に中身の濃い、充実した内容となっております。

今回の内容は、公開講演会報告、講演者、参加者からの感想からなっております。また、今号では「書評」が掲載されております。宗教心理学に関する書籍について、今後もニューズレターで取り上げていきたいと考えております。もしご関心のある書籍がありましたら、ぜひ書評としてご投稿いただければ幸いです。

これからも研究会に対する会員の皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしております。 (K.M)

[宗教心理学研究会の今後の予定]

2010年1月

第9回研究発表会(日本心理学会第75回大会ワークショップ) テーマ・発表者の提案・検討
日本心理学会第75回大会ワークショップ申し込み

2010年2月

宗教心理学研究会ニューズレター第14号の構成・編集作業

2010年3月

宗教心理学研究会ニューズレター第14号発行(予定)

発行: 宗教心理学研究会

編集: 宗教心理学研究会事務局

研究会事務局

担当: 松島公望 [psychology-religion@office.so-net.ne.jp]

研究会ホームページおよびメーリングリスト管理・運営

担当: 西脇 良 [rnishiwk@nanzan-u.ac.jp]

研究会ホームページ

http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/